

新潮文庫

嵐・ある女の生涯

島崎藤村 著



新潮社



あらし おんな しょうがい
嵐・ある女の生涯

定価は帯またはカバー
に表示してあります。

新潮文庫 草55 B

昭和四十四年二月十日 発行
昭和四十七年三月十日 六刷

著 者 島崎 藤村

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(〇三)二六〇一一
振替東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

新 潮 文 庫

嵐・ある女の生涯

島 崎 藤 村 著



新 潮 社 版

1837

目次

ある女の生涯	七
三人	二六
熱海土産	九
伸び支度	一三五
嵐	一四七
食堂	二〇九
分配	二三七

注解 三好行雄
解説 平野謙

嵐・ある女の生涯

ある女の生涯

おげんはぐっすり寝て、朝の四時頃には自分の娘や小さな甥ねいなぞの側に眼をさました。慣れない床、慣れない枕、慣れない蚊帳かやの内なかで、そんなに前後も知らずに深く眠られたというだけでも、おげんに取ってはめずらしかった。気の置けないものばかり——娘のお新に、婆やに、九つになる小さな甥まで入れると、都合四人も同じ蚊帳の内に枕を並べて寝たこともめずらしかった。

八月のことで、短か夜を寝惜むようなお新はまだよく眠っていた。おげんはそこに眠っている人形の側でも離れるようにして、自分の娘の側を離れた。蚊帳を出て、部屋の雨戸を一二枚ほど開けて見ると、夏の空は明けかかっていた。

「漸おそく来た」

とおげんは独りひとでそれを言ってみた。そこは地方によくあるような医院の一室で、遠い村々から来る患者を容れるための部屋になっていた。蜂谷という評判の好い田舎いなか医者がそこを経営していた。おげんが娘や甥を連れてそこへ来たのは自分の養生のためとは言え、普通の患者が病室に泊まったようにも自分を思っていなかったというのは、一つはおげんの亡くなった旦那がまだ達者でさかりの頃に少年の蜂谷を引取って、書生として世話したという縁故があったからで。

「前の日に思い立って、翌あくる日は家を出て来るような、そんな旦那衆のようなわけにいかすか」「そうとも」

「ここは女だもの。俺おれは半年も前から思い立って、漸くここまで来た」

これは二人の人の会話のようであるが、おげんは一人でそれをやった。彼女の内部にはこんな独語を言う二人の人が居た。

おげんはもう年をとって、心細かった。彼女は嫁いで行った小山の家の祖母さんの死を見送り、旦那と自分の間に出来た小山の相続人でお新から言えば唯一人の兄にあたる実子の死を見送り、二年前には旦那の死をも見送った。彼女の周囲にあった親しい人達は、一人減り、二人減り、長年小山に出入してお家大事と勤めてくれたような大番頭の二人までも早やこの世に居なかった。彼女は孤独で震えるように成ったばかりでなく、もう長いこと自分の身体に異状のあることをも感じていた。彼女は娘のお新と共に——四十の歳まで結婚させることも出来ずに処女で通させて来たような唯一人の不幸なお新と共に最後の「隠れ家」を求めようとするより外にはもう何等の念慮をも持たなかった。

このおげんが小山の家を出ようと思ひ立った頃は六十の歳だった。彼女は一日も手放しがたいものに思ふお新を連れ、預り子の小さな甥を連れ、附添の婆やまで連れて、賑かに家を出て来たが、古い馴染の軒を離れる時にはさすがに限りない感慨を覚えた。彼女はその昂奮を笑いに紛わして来た。「みんな、行って来るぞい」その言葉を養子夫婦にも、奉公人一同にも残して置いて来た。彼女の真意では、しばらく蜂谷の医院に養生した上で、是非とも東京の空まではとこころざしていた。東京には長いこと彼女の見ない弟達が居たから。

蜂谷の医院は中央線の須原駅に近いところにあった。おげんの住慣れた町とは四里ほどの距離にあった。彼女が家を出る時の昂奮はその道のりを汽車で乗って来るまで続いていたし、この医

院に着いてもまだ続いていた。しかし日頃信頼する医者もとの許に一夜を送って、桑島くわばたけに続いた病室の庭の見える雨戸の間から、朝靄あさもやの中に鶏の声を聞きつけた時は、彼女もホッとした。小山の家のある町に比べたら、いくらかでも彼女自身の生れた村の方に近い、静かな田舎に身を置き得たという心地もした。今度の養生は仮令たとえ半年も前からおげんが思い立っていたこととは言え、一切から離れ得るような機会を彼女に与えた——長い年月の間暮して見た屋根の下からも、十年も旦那の留守居をして孤ひとりの閨おとめを守り通したことがある奥座敷からも、養子夫婦をはじめ奉公人まで家内一同膳を並べて食う楽しみもなくなったような広いがらんとした台所からも。

「御新造さま、大分お早いなし」

と言って婆やが声を掛けた頃は、お新までもおげんの側に集まった。

「お母さんは家に居てもあだぞい」とお新は婆やに言ってみせた。「冬でも暗いうちから起きて、自分の部屋を掃除するやら、障子をばたばた言わせるやら。そんなに早く起きられては若いものが堪たらんなんて、よく家の人に言われる。わたしは隣りの部屋でも、知らん顔をして寝ているわいなし——ええええ、知らん顔をして」

お新はこんな話をするにも面長な顔を婆やの方へ近く寄せて言った。

そこへ小さな甥の三吉が飛んでやって来た。前の日にこの医院へ来たばかりで種々いろいろな眼についたものを一々おげんのところへ知らせに来るのも、この子供だ。蜂谷の庭に続いた桑島を一丁も行けば木曾川で、そこには小山の家の近くで泳いだよりはずっと静かな水が流れていることなどを知らせに来るのも、この子供だ。

「桑島の方々が焼けていたで。俺がなあ、真黒に焼けた跡を今見て来たぞい」

こんなことを三吉が言出すと、お新は思わずその話に釣り込まれたという風で、

「ほんとに、昨日のようにびっくりしたことはない。お母さんがあんな危ないことをするんだもの。炭俵に火なぞをつけて、あんな垣根の方へ投^なつてやるんだもの。わたしは、はらはらして見ていたぞい——ほんとだぞい」

お新はもう眼に一ぱい涙を溜^ためていた。その力を籠^こめた言葉には年老いた母親を思うあわれさがあった。

「昨日は俺も見ていた。そうしたら、おばあさんがここのお医者さまに叱^のられているのさ」

この三吉の子供らしい調子はお新をも婆やをも笑わせた。

「三吉や、その話はもうしないでくれ」とおげんが言出した。「このおばあさんが悪かった。

俺も馬鹿な——大方、気の迷いだらずが——昨日は恐ろしいものが俺の方へ責めて来るじゃないかよ。汽車に乗ると、そいつが俺に随^ついて来て、ここの蜂谷さんの家の垣根の隅^{すみ}にまで隠れて俺の方を狙^{ねら}ってる。さあ、責めるなら責めて来いって、俺も堪らんから火のついた炭俵を投げつけてやったよ。もうあんな恐ろしいものは居ないから、安心しよや。もうもう大丈夫だ。ゆうべは俺もよく寝られたし、御^み霊^{たま}さまは皆を守っていて下さるし、今朝は近頃のない気分が清々^{せいせい}とした」

おげんは自分を笑うようにして、両手を膝^{ひざ}の上に置きながらホッと一息を吐いた。おげんの話にはよく「御^み霊^{たま}さま」が出た。これはおげんがまだ若い娘の頃に、国学や神道に熱心な父親か

院に着いてもまだ続いていた。しかし日頃信頼する医者もとの許に一夜を送って、桑畠くわばたけに続いた病室の庭の見える雨戸の間から、朝靄あさもやの中に鶏の声を聞きつけた時は、彼女もホッとした。小山の家のある町に比べたら、いくらかでも彼女自身の生れた村の方に近い、静かな田舎に身を置き得たという心地もした。今度の養生は仮令半年も前からおげんが思い立っていたこととは言え、一切から離れ得るような機会を彼女に与えた——長い年月の間暮して見た屋根の下からも、十年も旦那の留守居をして孤ひとりりの閨おむすを守り通したことがある奥座敷からも、養子夫婦をはじめ奉公人まで家内一同膳を並べて食う楽しみもなくなったような広いがらんとした台所からも。

「御新造さま、大分お早いなし」

と言って婆やが声を掛けた頃は、お新までもおげんの側に集まった。

「お母さんは家に居てもあだぞい」とお新は婆やに言ってみせた。「冬でも暗いうちから起きて、自分の部屋を掃除するやら、障子をばたばた言わせるやら。そんなに早く起きられては若いものが堪たらんなんて、よく家の人に言われる。わたしは隣りの部屋でも、知らん顔をして寝ているわいなし——ええええ、知らん顔をして」

お新はこんな話をするにも面長な顔を婆やの方へ近く寄せて言った。

そこへ小さな甥の三吉が飛んでやって来た。前の日にこの医院へ来たばかりで種々いろいろな眼についたものを一々おげんのところへ知らせに来るのも、この子供だ。蜂谷の庭に続いた桑畠を一丁も行けば木曾川で、そこには小山の家の近くで泳いだよりはずっと静かな水が流れていることなぞを知らせに来るのも、この子供だ。

おげんは親しげに自分のことを娘に言つて見せて、お新がそこへ持つて来た鏡に向おうとした。ふと、死別してから何十年になるかと思われるようなおげんの父親のことが彼女の胸に来た。おげんの手はかすかに震えて来た。彼女の父親は晩年を暗い座敷牢に送つた人であつたら。

「ふーん」

思わずおげんは唸^{うな}るような声を出して自分の姿に見入つた。彼女が心ひそかに映ることを恐れたような父親の面影のかわりに、信じ難いほど変り果てた彼女自身がその鏡の中に居た。

「えらい年寄になつたものだぞ」

とおげんは自分ながら感心したように言つて、若かつた日に鏡に向つたと同じ手付で自分の眉^{まゆ}のあたりを幾度となく撫^なで柔げて見た。

「ひどいものじゃないかや。何だか自分の顔のような氣もしないよ」

とまたおげんは言つて、鏡を娘の方へ押しやつた後でも嘆息した。

「ふーんのようなことだ」

とお新もそこへ笑いこぼした。

静かな日がそれから続くようになった。蜂谷の医院に来て泊っている他の患者達のことには就^ついても、一番早くいろいろな報告をもつて来て、おげんの部屋を賑かすのは小さな甥^{わが}だった。三吉が小山の家の方から通っている同じ学校の先生で、夏休みを機会に鼻の治療を受けに来ている人があると、三吉は直ぐそれを知らせにおげんのところへ飛んで来るし、あわれげな啞^{おとし}の小娘を連

れて遠い山家の方から医院に着いた夫婦があると、それも知らせに飛んで来た。おげんはこの小さな甥やお新に誘われて木曾川の岸の岩石の間に時を送りに行つて来ることもあった。夏らしい日あたりや、影や、時の物の茄子なすでも漬けて在院中の慰みとするに好いような沢山な円い小石がその川岸にあった。あの小山の家の方で、墓参りより外にめつたに屋外やとに出たことのないようなおげんに取つては、その川岸は胸一ぱいに好い空気を呼吸することの出来る場所であり、透きとおるような冷い水に素足を浸して見ることも出来る場所であつた。おげんがその川岸から拾い集めた小石で茄子などを漬けることを楽しみに思つたのは、お新や三吉や婆やを悦ばせたいばかりでなく、その好い色に漬かつたやつを同じ医院の患者仲間に、鼻の悪い学校の先生にも、啞おとしの娘を抱いた夫婦者にも振舞いたいからであつた。彼女はパンを焼くことなぞも上手で、そういうことは好きでよくした。在院中の慰みの一つは、その家から提げさせて来た道具で、小さな甥のため三時がわりのパンを焼くことであつた。三吉はまた大悦びで、おばあさんが手製のふかしたてのパンを患者仲間の居る部屋々々へ配りに行くこともあつた。

おげんが過ぎ去つた年月のことをしみじみ胸に浮べることの出来たのも、この静かな医院に移つてからであつた。部屋に居て聞くと、よく蛙かたずが鳴いた。昼間でも鳴いた。その声は男ざかりの時分の旦那の方へも、遠い旅から年をとつて帰つて来た旦那の方へもおげんの心を誘つた。彼女が小山の家を出ようと思ひ立つたのは、必ずしも老年の今日に始まつたことではなかつた。旦那も達者、彼女もまだ達者で女のさかりの頃に、一度ならず二度ならず既にその事があつた。旦那くらい好い性質の人で、旦那くらい又、女のことには弱い人もめずらしかつた。旦那が一旗揚げる

と言って、この地方から東京に出て家を持ったのは、あれは旦那が二十代に当時流行の狨虎ちんここの毛皮の帽子を冠かぶった頃だ。まだお新も生れないくらいの前のことだ。あの頃にもう旦那と関係した芸者は幾人ともなくあつて、その一人に旦那の子が生れた。おげんがそれを自分の手で始末しないばかりに心配して、旦那の行末の楽みに再びこの地方へと引揚げて来た頃は、さすが旦那にも謹慎と後悔の色が見えた。旦那の東京生活は結局失敗で、そのまま古い小山の家へ入ることは留守居の大番頭に対しても出来なかった。旦那が少年の蜂谷を書生として世話したのも、しばらくこの地方に居て教員生活をした時代だった。旦那がある酌婦しやくふに關係の出来たのもその時代だ。その時におげんは旦那の頼みたのしみがたさをつくづく思い知つて、失望のあまり家を出ようとしたが、それを果さなかった。正直で昔気質むかしがたぎな大番頭等へも詫わづらひの叶かなう時が来た。二度目に旦那が小山の家の大黒柱の下に坐った頃は、旦那の一番働けた時代であり、それだけまた得意な時代でもあつた。地方の人の信用は旦那の身に集まるばかりであつた。交際も広く、金廻りもよく、おまけに人並ひとならずぐれて唄うたう声のすずしい旦那は次第に茶屋酒を飲み慣れて、土地の芸者と關係するようになった。旦那が自分の知らない子の父となつたと聞いた時は、おげんは復たかと思つた。その時もおげんは家を出る決心までして、東京の方に集まつている親戚の家を訪ねに行つたこともあつたが、人の諫いさめに思い直して国へと引返した。あれほどおげんは頼み甲斐がひのない旦那から踏みふみにじられたように思いながらも、自分の前に手をついて平あやまりにあやまる旦那を眼前めづまへに見、やさしい声の一つも耳に聞くと、つい何もかも忘れて旦那を許す氣にもなつた。おげんが年若な倅せがれの利発さに望みをかけ、温順おとなしいお新の成長をも楽みにして、あの二人の子によって旦那の不品行を忘